

## 秋の風

山田真砂年

街中をあふるる音も秋めける  
苦行する釈迦の肋や秋の風  
山見ゆる安堵や秋津群れなして  
日の暮れてほのと明るし蕎麦畑  
アワダチサウ通過列車に泡立ちぬ  
フクシマは今も背高泡立草  
モノレールの腹を見上げて秋の雲  
とんぼうのたひらに飛んで水の上  
とんぼうの止まれば揺るる草の丈  
一つ灯に集まつてくる夜学かな  
八朔や慈善バザーの公民館  
赫々と残暑の道に影歪め  
蕎麦の花山壁を這ふ雲まぶし  
コスモスや墓のまはりを吹かれをり  
脚高く渡る秋草茫々と  
朝から晴れて風も稲刈日和かな  
阿夫利嶺の水に沈めり新豆腐  
葛匂ふ駅なり乙女とふ名なり  
日蓮の花押なむなむ秋の風  
地の色のあらはや曼珠沙華五本  
彼岸花群れて隙間のあからさま  
菊枕沈むがごとく寝入りけり  
破蓮や鴉も腹のへりし頃  
彼岸花茎ついついと果ててをり  
隆起せし地層荒々崖すすき